

フエ・フォンヴィン社旧外港集落の天后宮と 関聖殿の調査基礎報告

野間晴雄, 西村昌也, 篠原啓方, 佐藤 実,
岡本弘道, 木村 自, 氷野善寛, 熊野 建,
グエン・ヴァン・ダン, グエン・マイン・ハー

Basic Research Report on *Tianhou (Mazu)* and *Guan Yu* Temples located
at the Outer Port Settlement of Hué in Vietnam

NOMA Haruo, NISHIMURA Masanari, SHINOHARA Hirokata,
SATO Minoru, OKAMOTO Hiromichi, KIMURA Mizuka, HINO Yoshihiro,
KUMANO Takeshi, NGUYỄN Văn Đăng, NGUYỄN Mạnh Hà

キーワード 天后宮（媽祖廟）、関帝廟、フエ、明郷、外港集落

1. はじめに

本報告では、かつての中国系ベトナム人集落“明郷（^{ミンフオン}Minh Hương）”の両端に地界象徴的に建てられたとされる天后宮、関聖殿の基礎研究的報告を行う。

天后宮（現在は *Chùa Bà* と呼ばれている。中国の媽祖廟に相当）は明郷集落の北縁に、関聖寺（現在は *Chùa Ông* と呼ばれ、中国の関帝廟に相当：位置は口絵4、6参照）はディアリン集落の中央付近に位置し、両者間は約820m 離れており、かつてはその間に明郷の家屋が並んでいたとされる。ともに正殿や門構えが *Huong* 川に向いているのが特徴である。船着き場が川岸にあり、そこから天后宮や関聖殿にも道が通じていた。とりわけ関聖殿にはその取り付け道路が明瞭に現在も残っている。天后と関帝は、ともにフエでは中国系の神として捉えられている¹⁾。

1) フィン・ディン・ケット（本多守訳）「フエの神格祭祀について」『ベトナムの社会と文化』第5・6号、2005年、205-225頁

2. 天后宮や関聖殿の歴史的背景

2.1 天后宮簡史

天后宮の歴史的変遷に関しては、Đào Duy Anh、陳荊和の研究²⁾ や Trần Nguyên Đăng 2006 “Sơ lược về việc hình thành Thiên Hậu Cung (Chùa Bà)” による天后宮の紹介資料などから、以下のようにまとめることができる。

天后宮は、明郷社の郷簿に付されていた明命16（1835）年の書状に、天后宮は150年経過しているという記述があり、正和6（1685）年に創建されたとする考えがある。以前の建築は中央に前堂と正殿（16×22m）を配し、正門に向かって左側に先賢祀堂（現在 Đình một trăm họ：百姓亭と呼ばれる）が、右側に郷会の座所（Hội Hương、現在 Nhà tâng と呼ばれる）が配されていた。それぞれ、桁行7間の規模であった。また正殿の前には三闕（Tam quan：16×10m）という3つの入り口を有す楼門が配されており、また明命14（1833）年には勅令により工部などが修築をしている。明命16（1835）年にも修築を行い、成泰16（1904）年には、辰年台風とよばれる大型台風により前堂が崩壊したため、維新6（1912）年に重修を行った。また、建築の木造部に関しては、前堂を撤収して、正殿の修理に利用し、以前の前堂の基礎を拝庭とし、4つの標柱（trụ biểu）を建て増した。保大12-13（1937-38）年には三闕を重修している。

しかし、1946年に始まった焦土抗戦作戦により、同年7月27日に郷会堂と三闕が焼失し、先賢堂のみが残った。幸いにも前日に寺が焼かれる情報が入ったため、尊像や寺財などを先賢堂に避難し焼失を免れた。ただ、焼失後は尊像などをまつ場がなく、フェ市の Chi Lăng 通りの瓊州幣の Bà Nhở 寺（海南会館の昭応寺のこと³⁾）に避難させ、さらにはフェ市の Bạch Đằng 通りの関聖寺（Chùa Ông）に移した。1958年に、村人や省内出身者で、天后宮に関心を持つものが集まり、Trần Nguyên Thuốc 氏を長として、重建委員会を結成し、1959年4月には、Hậu Tâm（後寝：正殿後方部のことか？）、Tiền Đàn（先壇）、Hội Hương（郷会堂）を再建したが、正殿再築は資金不足でかなわなかった。先賢堂は丈夫な作りであったため、簡単な修理ですんだ。1970年には明郷村の人たちが洪鐘を鑄造させて寄進しており、本堂北側に吊るされている。

2003年3月23日の媽祖祭礼時に、アメリカより Hồ Văn Tâm と Lưu Thị Bút 夫妻が帰郷し、先壇と先賢堂などの重修のための多額の寄付をし、募金班が結成され寄付運動が始まった。1993年には Miêu Ngải Công Đức（Miêu Trần Tiên Thành、文明陳公廟：陳踐誠を祀る）が、飲み屋に占拠され、建物自体の損傷につながり、2005年に、社人民委員会のおかげでようやく元に復することができた。そのため、Miêu Ngải Công Đức が再び占拠されることのないような状態にする必要が生じ、募金班の基金で重修を行った。また先賢堂の痛みがひどくなったため、募金班の基金で先賢堂の重建を優先させ、さらに残りの基金で先壇を重修した。2006年6月16日には後寝（Hậu Tâm：正殿の尊像安置部のことか）と前庭部の4

2) Đào Duy Anh, “Phố Lữ première colonie Chinois du Thừa Thiên,” Bulletin des Amis du Vieux Huế, 30-3, 1943年、249-265頁。陳荊和「承天明郷社興清河庸－順化華僑史之一頁」『新亞學報』4-1, 1959年、305-328頁。

3) 海南会館でも媽祖を祀っている。

標柱に龍、麒麟、亀、鳳の装飾を施した。

また寺田寄進に関する記録としては、景興7（1746）年に清河社の人による寄進（郷簿に付されていた地券）や、維新6（1870）年頃、陳踐誠が周囲の村落から42畝の土地を買い取り寄進している⁴⁾。1944年には香火田の剰余収入で田を1畝6高買い足したため、最終的には43畝9高の寺田を所有していた。

天后自身は、阮朝期の明命7（1826）年に勅封を受け、明命12（1831）年、紹治2（1842）年、嗣徳3（1850）年に加封を受けているとされるが、原資料は不明である。

2.2 関聖殿について

関聖殿は関帝を祀る正殿と、その後方の仏教寺院である靈光寺（Linh Quang Tự）からなり、それらの創建に関しては全く言及資料がない。正殿には関聖寺、道路前の門には関聖殿の文字が掲げられている。天后宮と同型の乾隆45（1780）年の鉄製香炉が、物質文化としてもっとも古い資料である。当香炉には、関帝と観音菩薩を祀ったことが併記されており、靈光寺も関聖殿同様に古くさかのほる可能性を有している。また正殿に向かって右側には嘉隆3（1804）年鑄造の梵鐘がある。さらに参道の北側脇には嗣徳帝の御製詩を記念した石碑（1861年）がある。

陳荊和の地簿資料研究⁵⁾では、1787年に清河社の華僑商人が関帝廟周辺の地霊の土地を購入し、商区を増大したため、関公祀（現関聖殿）の廟門が塞がれたことでトラブルが起きている。そして、地霊社民が西山朝に請願し、西山朝は華商の商業権利と地霊社の宗教禁忌の両方に配慮をした解決をしたとしている。

現寺僧のThích Quang Diệu（釈光妙）からの聞き取りでは、1946年頃、フランスとの独立戦争で、フランス軍がここに基地／トーチカを建設し、ベトナム軍撤退時の焦土作戦で焼かれたとようだ。1963年に廟は再建されたが、過去の寺域は隣接する小学校の敷地も含む広大なものであったとされる。南側には現在、1963年に設立された地域の中学・高等学校がある。もともとはLan Sanというフランス人宣教師が建設したカトリック系の学校で、1967年に小学校を併設している。また、関聖殿の北隣には明郷の会館があったとされる。

（2章担当：西村、岡本）

3 天后宮と関聖殿の建築配置と軸線

天后宮と関聖殿の建物群については、建築家のĐỗ Thi Thanh Mai氏に、測量図面を依頼した（図1）。また、トランシットコンパスを用い、門・建物の中心点を結ぶ方位角を計測した。

4) 文明陳公廟内の刻文による。陳踐誠（1813-1883年）は明郷の名族出身で、福建出身の初代から数えて7代目にあたり、1838年に進士合格後、兵部尚書や欽差大臣などを務めている。

5) 陳荊和（前出）

3.1 天后宮（図1上）

計測は、西から正殿の中央入口、中央回廊（参道）の両端（突き当たりの階段手前、入口）、道路沿いの門の4点で行った。天后宮は東向きで、正殿は真西から北へ8度振り（方位278-98度）、ほぼ東西方向である。

3.2 関聖殿（関帝廟：図1下）

計測は、西から正殿、参道の間（両脇に柱のある場所）、道路脇の門、川沿いの門の4点で行った。関聖殿正殿のすぐ裏にある建物（靈光寺）は、中央入口と入口外の柱の2点で計測した。関聖殿は東向き、正殿は真西から北に24度振り（方位294-114度）、背後の靈光寺も同様である。ほぼ西北西-東南東方向である。

3.3 両者の比較

天后宮と関聖殿の方位角差は16度ある。両者の方位は、それぞれ意図的に定められたものと思われ、建設時期や設計思想が異なっていた可能性も念頭におく必要がでてきた。また調査期間中、天后宮・関聖殿以外の建物の方位をいくつか計測したが、そのうち清河亭の方位が天后宮と同じ（278度）であった。同一の方位に、信仰的な意味があるのか、あるいは同時期の成立を意味するのか、などが今後検討の課題となる。ちなみに両者の間にある文明陳公廟は、20世紀後半に建てられたもので、その方位は263度であり天后宮や清河亭とは15度の差がある。

また、Thanh Hà から Bao Vinh にかけての道路沿いの民家には、道路に平行する形で門を設けず、道路との直交軸に対して角度をややずらした例が多く見られる（図1）。フェ人の風水の思想においては、道路と平行して門を設けるのは良くないとされている。建物の方位に、道路の方向が影響している可能性も考えられる。

また周辺ビンフォンの廟には、門のすぐ奥に Binh phong（屏風）という、仕切り用の壁が設けられたものが多いが、天后宮と関聖殿には存在しない。同地域で見たビンフォンは、高さおよそ1~1.5メートル、幅およそ1.5~2メートルの壁で、門から廟に入る時はこのビンフォンを迂回しなければならない。門の設け方は、こうした外部と内部を障害物によって隔てる考え方に相通じるものがある。ただし、天后宮と関聖殿の場合、鉄製香炉が参道上に配置されており、その役割を託されたと考えられないでもない。

（3章担当：篠原、西村）

4 文字資料の紹介

現在確認できる歴史資料（鐘・石碑・陶磁器・扁額・文献資料）について紹介を行う。

表中の資料No.は、2桁の数字のものは文献資料を示し、3桁の数字（No.101以降）のものは、それ以外の歴史文字資料を示す。

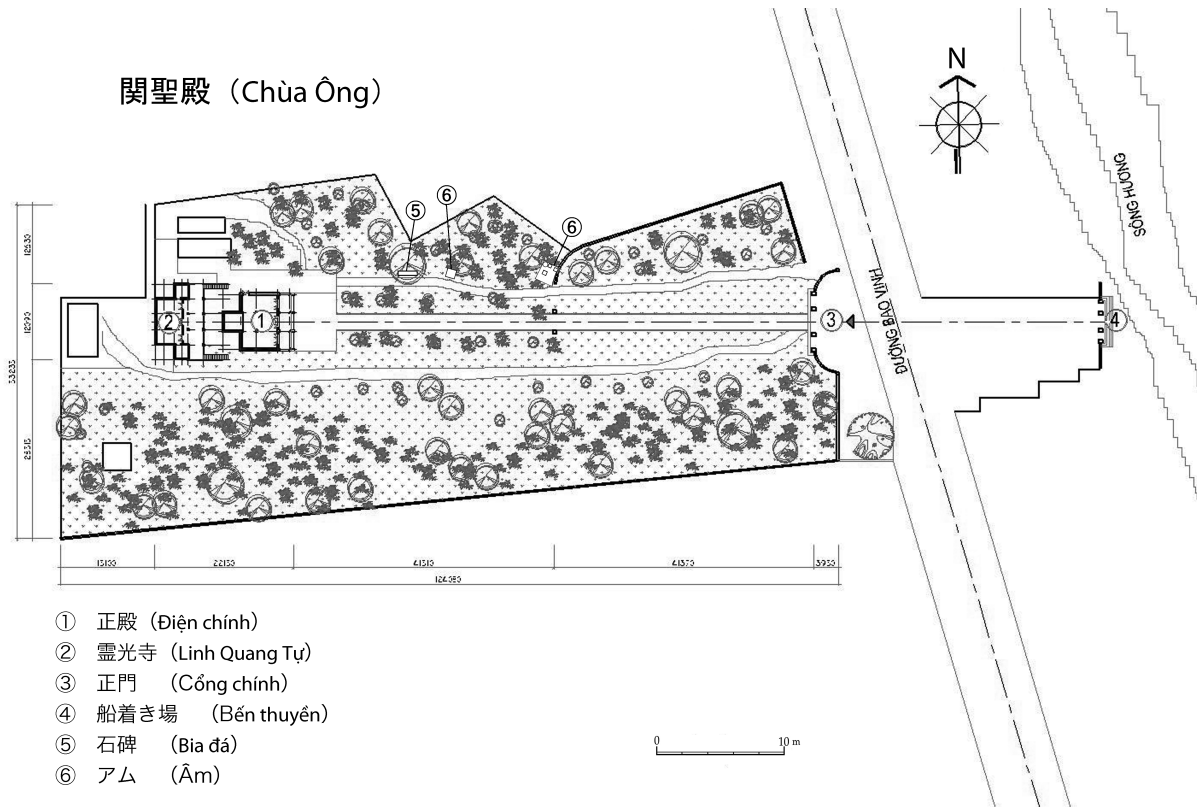
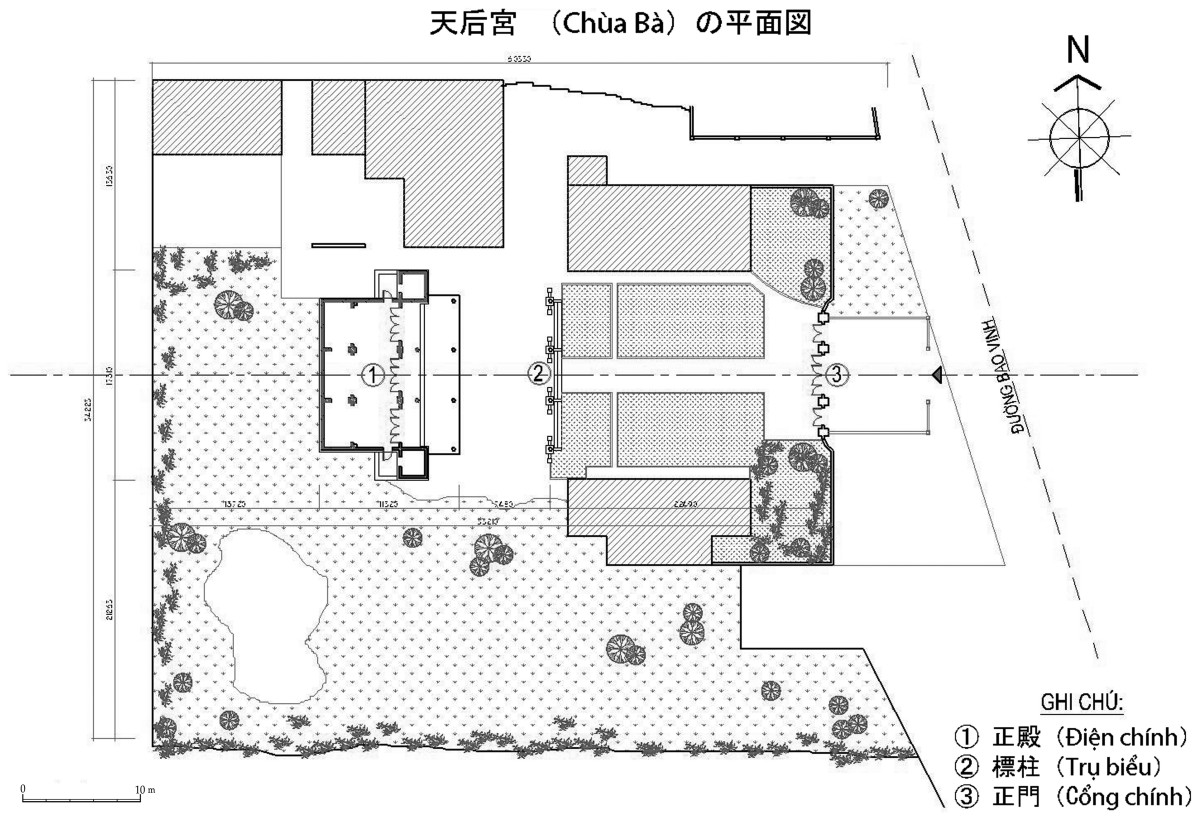


図1 天后宮（上）と関聖殿（下）の全体図（原図は Đỗ Thị Thanh Mai 測量・製図）

4.1 天后宮

天后宮における8月29日・30日及び9月3日の調査の過程で確認した歴史資料は、以下の通りである。

(a) 文献資料

(a)-1 経典・書籍等

資料No.	資料名	資料形式	年代
01	天后聖母救苦真經 (Pl.1)	木版・線装→ステープラー再製本	清・光緒元年(1875)序
02	天后聖母救苦真經	上のコピー本	— (同上)
03	金剛般若波羅蜜經	木版・線装→ステープラー止め	同慶2年(1887)序
04	般若波羅蜜多心經註講	木版・線装→ホチキス再製本	保大丙子年(1936)重刻
05	関帝明聖真經演義 附音国語	もと木版?→影印・洋装	(保大8年・1933) / 1974年
13	金剛孫陀普門一卷	木版・線装	(己亥年・1935?)
14	慈悲三昧水懺卷上	石印?・洋装・ベトナム音註	—
15	慈悲三昧水懺卷中	石印?・洋装・ベトナム音註	—
16	慈悲三昧水懺卷下	石印?・洋装・ベトナム音註	—
17	禪門日誦	木版・線装→ステープラー再製本	成泰10年(1898)序
18	地藏菩薩本願經卷上	もと石印?の原本のコピー本・ベトナム音註	(1944)
19	地藏菩薩本願經卷中	もと石印?の原本のコピー本・ベトナム音註	保大甲申年(1944)
20	地藏菩薩本願經卷下	もと石印?の原本のコピー本・ベトナム音註	(1944)
21	祭礼帖(文末に全文写真紹介)	ノート/手書き	(保大5年・1930)
22	Kinh kim-cuong (金剛般若波羅蜜經)	ベトナム語活字・洋装本	1969年
23	Kinh đại báo phụ-mẫu (大報父母恩重經)	ベトナム語活字・洋装本	1962年
24	Tam-bảo (三宝:阿弥陀一洪名一孟蘭一普門一金剛)	ベトナム語活字・洋装本	1949年
25	Từ bi thủy sám pháp (慈悲水懺法)	ベトナム語活字・洋装本	1950年

1と2の『天后聖母救苦真經』、5の『関帝明聖真經演義 附音国語』、及び雑記帳的性格を持つ21の祭礼帖(本文最終頁に全文写真紹介)を除くと、全て仏教経典で占められている。何故仏教経典が大多数を占めるのかについては、管理人から具体的な理由を聞くことはできなかった。ただし、ベトナム音註の書き込みが見られるのが1、17であり、これらに関しては儀礼の中での音読に用いられていた可能性が高いと思われる。

その他、そもそも刊本自体がベトナム音註を含むベトナム刊本は、4、5、14~16、18~20であるが、これらが儀礼の中で音読されたかどうかは定かではない。また、ベトナム語の書籍は4冊確認できたが、いずれも仏教経典であった。

最も興味深いのは、21の祭礼帖である。内容から推して、天后宮が焼失する1946年頃以前に、天后宮の管理者もしくは運営にかかわる中心人物によって執筆されたものと思われるが、当時行われていたと思われる儀礼の式次第やその中で音読される祭文の内容、さらには天后宮内部の Nhà Tàng 内に現在もある対聯の句も「郷会对」として記録されている。実際に現在行われている祭祀儀礼と詳細に比較する

ことで、新たな知見が得られるかも知れない。

(a)-2 祭文

資料No.	資料名	資料形式	年代
06	個人の祈願に用いる祭文「疏」	手書き	戊子年（2008?）
07	清明節の祭礼に用いる祭文「牒」	プリンタ出力・ベトナム音註	—
08	旧暦1月16日の祭礼に用いる祭文「状」	プリンタ出力・ベトナム音註	—
09	旧暦7月16日の前賢祠堂における祭礼に用いる祭文「告」	プリンタ出力・ベトナム音註	—
10	天后聖母の祭礼に用いる祭文「告」	プリンタ出力・ベトナム音註	（丁亥年・2007?）
11	城隍廟での祭礼に用いる祭文「告」	プリンタ出力・ベトナム音註	—

計6件確認できた祭文の内、06については先代の管理人による手書きの「疏」であり、個人の祈禱に際して起草されたものと思われる。先代の管理人は漢字が読め、文書を読み上げることができるので、子室に恵まれるようにと多くの人びとが訪れていたが、2008年2月に死去して以来、訪れる人も少なくなったという。その他の祭文についてはプリンタ出力されたものであり、祭祀儀礼において音読に用いるための祭文であると思われる。07は清明節に用いられる「牒」であり、墓を掃き清め死者を弔う内容が記されている。08と11は旧暦1月16日に村の安全を祈る行事の際、用いられる文書であり、08は安全を祈願する「状」である。一方、11は城隍廟に供物を捧げる際に読み上げられる「告」であるが、文面には日付として「正（月）十六（日）」と併せて「十一月二十二日」という日付も記されており、この日にも城隍廟に対して同様の祭礼が執り行われ、この「告」が用いられるものと推測される。09は旧暦7月16日に前賢祠堂で行われる祭礼の際に用いられる「告」である。10（Pl.2）は旧暦3月23日に執り行われる天后聖母の祭礼の際に用いられる「告」として出されたものだが、文面を見ると「丁亥年正月十九日」とあり、何らかの混同がある可能性が高い。

(b) 扁額・ペナント

資料No.	資料名	資料形式	年代
106	本殿内ペナント（右側）	ペナント	—
107	本殿内ペナント（中央）	ペナント	癸丑年（1973?）
108	本殿内ペナント（左側）	ペナント	—
132	天后宮扁額1（Pl.3）	木製?	己亥年（1959）
133	天后宮扁額2	木製?	己亥年（1959）

天后宮本殿の前面には2枚の扁額（Pl.3）が、また内部には3枚のペナントが架けられている。内部向かって右側の106のペナントには「萬子萬孫」、中央の107のペナントには「聖壽無疆」、左側の108のペナントには「財源永發」と、それぞれ四文字ずつ記されている。恐らくはこの三枚はセットで寄進されたものと思われる。いずれもビニールで保護されているが、やや読みにくい字もある。寄進者はそれぞれ個人名・店の屋号が記されている。

前面の扁額は、132はフエの潮州同郷会から、133は広肇同郷会から、いずれも1959年に寄進されたものである。

(c) 鐘・香炉等

資料No.	資料名	資料形式	年代
22	天后宮大洪鐘 (P1.4)	青銅製	1970年
102	本殿内祭壇にある香炉1 (P1.5)	陶磁器	雍正元年 (1723)
103	本殿内祭壇にある香炉2	陶磁器	嘉慶19年 (1814)
109	天后宮殿前香炉	鉄製香炉	嘉慶25年 (1820)
117	天后宮殿前鉄製香炉2 (P1.6)	鉄製香炉	乾隆45年 (1780)
118	本殿内向かって左側祭壇花瓶01	陶磁器	丁丑年 (1997?)
119	本殿内向かって左側祭壇花瓶02	陶磁器	庚午年 (1990?)
121	本殿内向かって右側祭壇にある大きめの香炉	金属製香炉	己亥年 (1959)

天后宮大洪鐘 (P1.4) は本堂向かって右脇の専用スペースに吊り下げられており、銘文が刻み込まれている。それによると、1970年7月22日 (農曆庚戌年6月20日) に鑄造されたこと、高さ1 m25cm、周囲長1 m75cm、重量225kg、経費が180,700ドン (ベトナム語表記による。漢文表記とベトナム語表記で金額が異なる)、明郷村が鑄造主体であったことなどがわかる。現在の状況から見て、少なくとも日常的に使われているようには見えなかった。

本殿内の香炉の内、とりわけ年代が古いと思われるのが102 (P1.5) と103である。特に102には雍正元年 (1723) の年代が表記されており、同年に本香炉が製造されたとすれば、今回の調査で確認した最古の遺物ということになる。103も嘉慶19年 (1814) の年代表記があり、非常に古い遺物である。

本殿外部の参道上には、2基の鉄製香炉が配置されている。大門をくぐってすぐの109は嘉慶25年 (1820) の銘文があり、117 (P1.6) には乾隆45年 (1780) の銘文があるが、いずれも中国の広東省広州府周辺で製造されたものである。なお117については、関聖殿殿前の鉄製香炉と年代・銘文・寄進者名等がほぼ同一であることから、両者は同時に注文され、鑄造されたものである可能性が高い。

なお、121については、1959年に天后宮を再建した際、海南幫から寄進されたものと思われる。

(d) 対聯・位牌など

資料No.	資料名	資料形式	年代
101	天后宮大門・対聯	—	—
110	本殿内向かって右壁際にあった祭壇上の札	紙	(乙酉年・2005?)
113	敷地内のアム1（左側から）の位牌	石?	—
114	敷地内のアム2の位牌（3つ）	石?	—
115	敷地内のアム3の位牌	石?	—
116	敷地内のアム4の位牌	石?	—
122	Nhà Tãng 内対聯（右側）	石?	—
123	Nhà Tãng 内対聯（左側）	石?	—
128	前賢祠堂外対聯01（右側から）	石?	—
129	前賢祠堂外対聯02	石?	—
130	前賢祠堂外対聯03	石?	—
131	前賢祠堂外対聯04	石?	—
134	天后宮本殿前面对聯・左	石?	—
135	天后宮本殿前面对聯・右	石?	—

以上の対聯・位牌などについては、その性格も様々であり、個別の検討が必要である。前述の通り、21の祭礼帖には122と123が記録されており、対聯の大多数は焼失以前からの文言である可能性が高いと思われる。一方で、アムに記された位牌の文言は当然ながら天后宮そのものとは直接に関係がなく、より広範なアム信仰との関連で検討する必要があるだろう。

4.2 関聖殿

現在関聖殿の裏手にある霊光寺については、本来関聖殿の遺物である鐘銘を除き、原則として除外した。

関聖殿における8月30日の調査の過程で確認した歴史資料は、以下の通りである。

(a) 文献資料

(a)-1 経典・書籍等

資料No.	資料名	資料形式	年代
01	関帝明聖真経演義 附音国語	影印・洋装	1974年?
05	Kinh Nhật Tung（日誦経）	ベトナム語活字・洋装本	仏暦2543年（1998）

01は天后宮にあったものと同じの洋装本であり、市販のものである。また、05は真新しいハードカバー本であり、最近購入したものであろう。今回の調査では焼失以前から関聖殿に伝わっていた経典・書籍等は確認できなかった。現在管理人をしている方は本来裏手の霊光寺の僧侶であり、1946年頃の廟の焼失以前の状況を把握していないこと、また現在は仏式の簡素な儀礼のみ行っていることなどのため、現在使用されている経文は多くない。

(a)-2 祭文

資料No.	資料名	資料形式	年代
02	個人の祈願に用いる祭文「疏」	印刷	—

関聖殿本殿内に置かれていた祭文は、大量に印刷されたものであり、内容も関聖殿信仰との直接の関連は読み取れないものであった。名前・日付等を記入する空欄が設けられており、祈願を行う者についての必要事項を記入して用いるようである。

(b) 扁額・ペナント等

資料No.	資料名	資料形式	年代
122	本殿内扁額 (Pl.7)	木製?	甲辰年 (1964?)
124	関帝像上部にある扁額	木製?	癸卯年 (1964)*
129	本殿内の大きな布製の傘	布製	丙子年 (1996?)

本殿内には、2枚の扁額と、布製の傘が置かれている。122 (Pl.7) は本殿内中央の手前上方に架けられており、フェの広肇会館・潮州会館・海南会館から寄進されたものである。一方123は本殿内中央奥の関帝像の上に詰め込まれており、寄進された扁額というよりは廟の再建時にその一部として造られたものと思われる。122は「歳次甲辰年秋」、123は「癸卯年十二月初八日」「陽曆一千九百六十四正月十二」と書かれているが、いずれも西暦1964年のものである。

129の布製の傘については、現在はアメリカ在住の人物から1996年に寄進されたものようである

(c) 鐘・香炉・石碑等

資料No.	資料名	資料形式	年代
03	御製詩碑 (Pl.8)	石製	嗣徳14年 (1861)
04	関帝廟大洪鐘 (Pl.9)	青銅製?	嘉隆3年 (1804)
132	関聖殿殿前鉄製香炉 (Pl.10)	鉄製香炉	乾隆45年 (1780)

03 (Pl.8) と04 (Pl.9) については既に碑文・銘文の翻刻が存在する。03は明命帝がもともと辛卯年 (明命12年・1831) に作った御製詩を刻するために嗣徳14年 (1861) に立てられた石碑であり、現在は関聖殿敷地の正殿に向かって右側手前にある。翻刻との対校を行ったが、異同はわずかであった。一方04はそれより古い嘉隆3年 (1804) の銘文が刻まれた鐘であり、上部には「関帝廟鐘」の四字が配置されているが、現在は関帝廟の後方にある霊光寺の2階右側 (北側) に吊されている。これも翻刻との対校を行ったが、かなりの異同が見受けられた。

関帝廟本殿の正面には、天后宮と同じく鉄製香炉 (Pl.10) が置かれている。香炉の上部は既に失われているが、銘文は天后宮のものと同じ乾隆45年 (1780) であり、両者は同時に注文されたものと思われる。

(d) 対聯・位牌など

資料No.	資料名	資料形式	年代
101	関帝廟大門・対聯（4つ）	石？	—
106	本殿外壁の対聯・向かって右端	石？	—
107	本殿外壁の対聯・右から二番目	石？	—
108	本殿外壁の対聯・左から二番目	石？	—
109	本殿外壁の対聯・向かって左端	石？	—
120	本殿内柱の対聯・向かって左側	木製？	—
128	本殿内柱の対聯・向かって右側	木製？	龍飛己巳年（？）
127	関帝廟位牌	木製？	—
131	関帝廟外牌門・対聯（2つ）	石？	—
133	敷地内のアム1	石？	—

以上の対聯・位牌等については、やはり今後改めて個別に検討する必要があるだろう。いくつか注意を引くものとしては、120・128の本殿内対聯である。「龍飛己巳年」という年号が実際に何年を指すのかは現時点では不明であるが、「龍飛」という年号表記自体は、東南アジアの華僑に関連する建築等で間々用いられているものが確認されている。ただし、ハノイ周辺やフエの非中国系建築で、19世紀末か20世紀前半頃に用いられている例があり、今後の研究を要する。また、127の関帝像前のテーブルに置かれている位牌には「昊天金闕至尊玉皇上帝玉陛下」「中天星主北極紫微大帝玉陛下」「右北斗九皇解厄星君」「左南曹六司延壽星君」の四神の名が書かれているが、それに相当する神像は見あたらない。信仰形態を考える上でも、さらなる調査・検討が必要である。

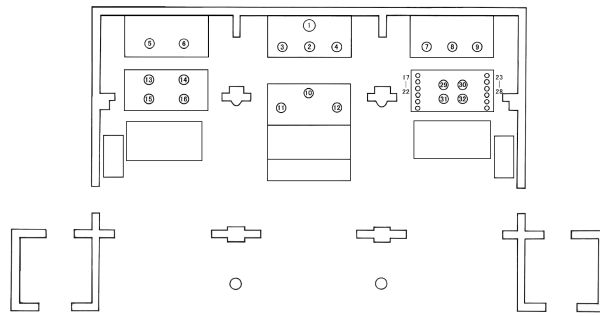
5. 信仰の実態について

本章では天后宮および関聖殿の信仰の実態について、神像の配置、及びフォンヴィン社に居住する中国系住民に対して行ったインタビュー資料に基づいて紹介する。先述のように、天后宮および関聖殿は華人と密接に関係した寺廟として建立された。今日両寺廟で我々が確認することのできる経文や神像は下記に記されているとおりである。これら経文や神像の多様性から看取できるように、華人の宗教施設として建立されて以降の変容は一様ではなく、信仰の形態は複雑で、多様性を帯びている。両寺廟を華人宗教の寺廟として一元化・単純化してしまわず、フォンヴィン社の歴史的・民族的重層性のなかに厚く編みこむためには、信仰形態の今日的様相を丹念に記述する必要がある。

5.1 神像の配置

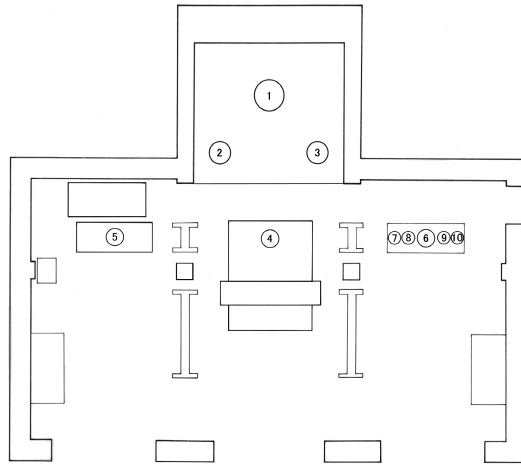
5.1.1 天后宮

神像の配置（図2上）は、おおよそ向かって中央に天后聖母像及びそれに付随する神像、向かって左側には文昌帝君・福德正神の神像と（科挙）受験者の像、向かって右側には三胎聖母娘娘と十二花妃公主の神像というように、本堂内が三つのゾーンに区分けされている。中央に鎮座する本尊・天后聖母のゾーンを挟んで、左側が男性の（そして男性が主に信仰の対象とするであろう）神々のゾーン、右側が女性の（そして女性が主に信仰の対象とするであろう）神々のゾーンとなる。この構図自体は関聖殿の



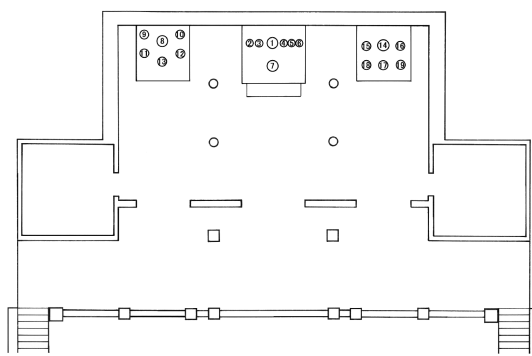
天后宮正殿内の尊像配置図

- | | |
|-------------|------------------------|
| 1. 天后聖母 | 10. 天后聖母 |
| 2. 天后聖母の息子 | 11. 千里眼 |
| 3. 侍女 | 12. 順風耳 |
| 4. 侍女 | 13-16. (科挙) 受験者 (侍従か?) |
| 5. 福德正神 | 17-28. 十二花妃公主 |
| 6. 文昌帝君 | 29-32. 観音菩薩 |
| 7-9. 三胎聖母娘娘 | |



関帝廟正殿内の尊像配置図

- | | |
|-------|------------------------|
| 1. 関帝 | 6. Thien Y-a-na (天依網娜) |
| 2. 周倉 | 7. 神像 (尊名不明) |
| 3. 関平 | 8-9. 菩薩 |
| 4. 関帝 | 10. 神像 (尊名不明) |
| 5. 財神 | |



関帝廟正殿背後の建物 (霊光寺) 2階内部の尊像配置図

- | | |
|--------------|-------------------------|
| 1. 釈迦如来 | 11. 阿弥陀如来 |
| 2. 観音菩薩 | 12. 阿弥陀如来 |
| 3. 布袋 (弥勒) | 13. 守衛 |
| 4. 布袋 (弥勒) | 14. 観音菩薩 |
| 5. 布袋 (弥勒) | 15. 達磨 |
| 6. 観音菩薩 | 16. 不明 (菩薩か?) |
| 7. 釈迦如来 | 17. 不明 (両手で「聖駕」縦箆の笏を持つ) |
| 8. 阿弥陀如来 | 18. 不明 (雲座に「福納祥迎」横箆) |
| 9. 阿弥陀如来 (額) | 19. 如来 |
| 10. 観音菩薩 (額) | |

図2 天后宮 (上)、関聖殿正殿 (中)、霊光寺 (下) の尊像配置図 (図面作成: 篠原啓方)

場合も同様である。

中央のゾーンの奥の神棚には、大きな天后聖母像（Pl. 11）があり、その前に天后聖母の息子の像（Pl. 12）、そしてその両脇に侍女（扇をもつ侍女：以下括弧内は Trần Nguyên Đăng 2006による呼称）の像が向かい合わせに置かれている。その手前のテーブルにも天后聖母像が置かれ、両脇に千里眼（左：Pl. 13）・順風耳（万里耳：Pl. 14）が向かい合って立てられている。（順風耳を万里耳と記している）。

右側のゾーンの奥の神棚には、三胎聖母娘娘（Pl. 15）の三体の神像が置かれている。その手前のテーブルの左右両側には、ガラスケースに収められた十二花妃公主の神像が大小六体ずつ配置されている。（幼児と Ông cheo と Bà cheo：娘が嫁に行くときに金を納める人が置かれている記述があり。12体の尊像の中に含まれているようだ）、なおそのテーブルの中央には四体の観音像が置かれているが、これは以前からあったものではない。

左側のゾーンの奥の神棚には、文昌帝君（右：Pl. 16）と福德正神（左：Pl. 17）が安置されている。その手前のテーブルの左右両側には、ガラスケースに収められた科挙受験者（侍従）の像が置かれている。

5.2.2 関聖殿

関聖殿（図2中）においても、本堂内の神像の配置は天后宮の場合と同じく、中央・右側・左側の三つのゾーンに分けることができる。中央のゾーンには関帝像（Pl. 18）とそれに付随する神像、左側のゾーンには財神像、右側のゾーンにはチャンパ系の女神である Thiên Y-a-na（天依婀那）とそれを囲む神像が配置されている。

中央のゾーンの奥の神棚には、大きな関帝像があり、その左右に周倉（左：Pl. 19）・関平（右：Pl. 20）の像が置かれている。ガラスケースの手前には小さな関帝像がある。

左側のゾーン奥の神棚には、財神（Pl. 21）が安置されている。

右側のゾーン奥の神棚の中央奥には Thiên Y-a-na の像（Pl.22）があり、それを取り囲むようにいくつもの神像が置かれている。Thiên Y-a-na の両脇の像二体は菩薩と思われるが、その他の神像については、管理人にも詳細はわからないとのことであった。

関聖寺後方の霊光寺の尊像（図2下）については、現地で如来・菩薩と呼んでいるものが、実際には逆ではないかと思われるものがあり、ベトナムにおける仏・菩薩の様式理解をふまえ、あらためて考える必要がある。また今回は省いたが、霊光寺の1階には信者（参拝者）が持参し、置いていった尊像を並べた棚がある。天后宮や関聖殿には、管理者が尊名を知らない像が存在するが、これはこうした信者による尊像の持ち込み行為に起因するとも考えられ、信仰空間（廟・宮・寺）と信者との関係を理解するうえで興味深い。

（5章担当：岡本、篠原）

6. 天后宮と関聖殿の祭礼日

天后宮 (Chùa Bà) と関聖殿 (Chùa Ông) の祭礼日は次の通りである。関聖殿 (Chùa Ông) については情報収集が十分にできていないので、今後の調査による収集を待たねばならない。天后宮の祭礼については天后宮 (Chùa Bà) 聞き取りと天后宮紹介資料 (Trần Nguyên Đăng: 前出) から以下のようにまとめられる。

なお、天后宮、関聖殿ともに祭礼時に齋食をする必要はない。天后宮などの村の主たる祭礼は明郷祭礼組織班 (Ban tổ chức lễ hội Minh Hương) が組織するようだ。

1月16日: Lễ cầu an (別称 ky yên: 村の安寧を祈る)、Lễ thành hoàng (城隍神に捧げものをする)、Lễ cô con (子供の安寧を祈る) を行う。

1月17日: Lễ hội các bà (別称 Vía các bà) Minh Hương の女性のための祭りで、キン族で、Minh Hương 人と結婚した人も参加する。Hội các bà (婦人による組織) がこの祭礼を行う。

2月2日 Lễ ngài Văn Xương – Phúc Đức: 文昌帝君と福德正神を祀る。文昌福德会が (Hội Văn Xương Phúc Đức) がこの祭礼を行う。

3月23日: Vía Bà (媽祖の命日)

7月16日: Lễ tế tiên hiền (先賢祭礼、別称: Lễ Trăm Họ (百族の命日) あるいは Thu tế (秋祭): 先賢堂で、村の創建者、歴代朝廷に仕えた村出身者、村で役職を努めた人を祀るもので、村の重要氏族 Thập Nhị Tôn Phái (十二宗派) をまつる場でもある (Trần Nguyên Đăng 2006)。

また、春節の元旦 (1月1日) の午後にもお参りする。

関聖殿 (Chùa Ông) は忌日祭のみが、関帝を祀る日として報告された。

6月24日: Ngày Vía (関帝の命日)⁶⁾

(6章担当: 岡本、篠原、西村、Nguyễn Mạnh Hà)

7. 信仰形態の実際

本節はインタビュー調査に基づき、今日のフオンヴィン社において、天后宮 (Chùa Bà) および関聖殿 (Chùa Ông) に対して行われている信仰形態の実際を、とくに中国系住民の社会関係、土地認識などの境界認識を糸口として分析する。

インタビュー調査は Minh Hương (ミンフォン)、Địa Linh (ディアリン)、Bao Vinh (バオビン) の各村落に居住し、自他ともに中国系と認めている住民に対して行った⁷⁾。調査を行った中国系住民の家庭は、Khương、Ngô、Lý、Luu、Trần、Nhan、Âu、Cam、Hầu、Châu、Phù、Huỳnh の12家族である (表1)。成員数の多い家族は少なく、Trần リネージを除いてほとんどが1世帯から数世帯で構成される比較的小

6) 中国や台湾では、命日にいくつかのヴァリエーションがあり、本貫地の違いを反映している可能性があるという (二階堂善弘私信)。また、1月にも村の祭礼をするらしいが、正確に聞き取っていない。

7) 本稿は中国系住民に関する分析を主眼としていないので、中国系住民に関する分析は別稿に譲りたい。

さな親族集団である。実際には、この12家族以外にも数家族の中国系住民がフォンヴィン社に居住している。しかし、普段村落内に居住していないなどの理由で、今回の調査では調査協力を得ることができなかった。

7.1 中国系住民の概況

聞き取り調査から、フォンヴィン社において中国系住民を指す語彙の複雑性が浮かび上がる。まず、調査地域の地名の一つでもある Minh Hương（ミンフォン）は、中国系住民を意味する表現でもある。また、Luu Nguyên Tô氏は全戸調査の際に、自らを người Hoa と表現していた。戸籍上は Luu Nguyên Tô氏もキン族であり、中国系住民であることを示すために người Hoa という表現を用いたようである。さらに、バオヴィンに居住している数家族は、ヴェトナムの民族制度上中国系住民として登録されていた。彼らの身分証明書の民族欄には、Hán と記載されている⁸⁾。よって、フォンヴィン社において中国系住民を指示する語彙は、少なくとも người Minh Hương（明郷人）、người Hoa（華人）、người Hán（漢人）の3種類があることが分かる。

これらの語彙のうち Minh Hương は中国系住民を指示すると同時に、フォンヴィン社においては村落名も示している。そのため、中国系住民を指す語としての Minh Hương と村落名称としての Minh Hương 村は、会話の中でしばしば意味を重複させて語られている。以下で Khương Văn Tài氏の事例を引きながら考えたい。

Địa Linh に居住する Khương Văn Tài氏は1932年生まれで、2008年の調査時点で76歳であった。妻はキン族の Dương Thị Ngọt氏である。家譜およびインタビューに基づくと、Khương Văn Tài氏の祖父が海南島琼州から Địa Linh に移住して、漢方薬の輸入販売を手がけていた。移住第1祖である祖父は、ヴェトナム人の妻を娶り、ヴェトナムで死亡した。父は祖父とともに漢方薬の輸入販売を生業としていた。しかし、その父は Khương Văn Tài氏が10歳のときに、彼の兄弟3人を連れて中国に帰った。その後、1度だけ手紙が来たものの、第2次世界大戦が勃発し、その後の行方は分からなくなってしまった。

インフォーマントへの聞き取り調査によれば、Khương Văn Tài氏は彼の祖父である第1祖の移住以来、Địa Linh に居住しつづけている。よって、居住地域は戸籍上 Địa Linh に属している。しかしそれにも関わらず、同時に Minh Hương にも属していると述べる。こうした認識は、Khương Văn Tài氏自身の自己アイデンティティのレベルの話ではない。Địa Linh に居住する人々からもそのように理解されている。たとえば、次のような事例がそのことを示している。現在 Khương Văn Tài氏は Địa Linh 村の

8) ヴェトナムの民族政策のなかで華僑・華人がどのように呼ばれているのかについて、今回の調査では十分に明らかにすることができなかった。ヴェトナム共産主義政権における民族政策の歴史を分析した古田の論考では、華僑・華人について次のように言及されている。「国籍の如何を問わず華僑がベトナム公民と同じような存在となるなかで、ベトナム側もベトナムを構成する民族の一つとして『華民族』（dân tộc Hoa）という範疇を設けるようになり……」（古田元夫1991『ベトナム人共産主義者の民族政策史 革命中のエスニシティ』大月書店、580頁）。つまり、一般的には華僑は người Hoa として民族分類されている。今回の調査において、中国系住民の一部が người Hán という民族名称を身分証明書に用いていたことと、ヴェトナムにおける民族政策上の中国系住民の分類については、今後詳細に分析する必要があるだろう。

老人会 (Hội người cao tuổi) 幹部の一人である。Khương Văn Tài 氏はその老人会のなかで、開墾廟の祭りなど、Địa Linh 村の重要な行事の祭祀をつかさどる仕事を担当している。つまり、Địa Linh 村における主要な構成メンバーの一人として認識されている。しかし一方で、村の村長は、次のような内容の発言を私にした。すなわち、Khương Văn Tài 氏は Minh Hương の人間であり、もともと彼に対する「よそ者」意識はあった。しかし、現在の村長が Địa Linh 村の村長に就任してから、居住年の新旧、帰属する村落に対する意識の違いなどの別なく、Địa Linh 村の成員として村落組織に組み込むことにした。そのため、Minh Hương に属する Khương Văn Tài 氏にも、Địa Linh 村における重要な行事を任せている。

Địa Linh があくまで土地そのものの名称として理解され、土地への帰属を意味するものであるのに対して、Minh Hương とは第一義的に中国系住民を指し、同時に地域を指示する名称として理解されている。Minh Hương をめぐるこうした両義性によって、天后宮 (Chùa Bà) は村落としての Minh Hương の信仰対象であると同時に、人のカテゴリーとしての Minh Hương の信仰対象ともなっている一方で、関聖殿 (Chùa Ông) が村落としての Địa Linh の信仰対象として理解されているのではないかと考えられる。

もちろん、天后宮 (Chùa Bà) と関聖殿 (Chùa Ông) が異なった信仰対象とされる現象については、別の解釈も可能であろう。とくに Chùa Ông (関帝に対する信仰) が中国的文化という枠組みを越えて、ヴェトナムの信仰体系のなかに深く根ざしていることや、天后宮 (Chùa Bà) が Minh Hương の村落枠組みを越え、フオンヴィン社を中心とした地域全体における信仰対象として理解されている可能性を指摘することができる。そのため、本節における解釈は、あくまでフオンヴィン社に居住する中国系住民へのインタビュー調査に基づく解釈であることを明記しておきたい。

7.2 天后宮 (Chùa Bà) と関聖殿 (Chùa Ông) の信仰形態

Minh Hương に対する帰属意識と各村落に対する認識の違いが、天后宮 (Chùa Bà) および関聖殿 (Chùa Ông) に対する信仰形態の違いとして見出しえるのではないかという仮説の検証に移りたい。

調査対象の中国系住民は、それぞれ Minh Hương 村が 5 家族、Địa Linh 村が 3 家族、Bao Vinh 村が 4 家族であった。各家族にはヴェトナムへの移住の歴史を含め、経済状況、社会状況が一様ではない。そのため、天后宮 (Chùa Bà) および関聖殿 (Chùa Ông) それぞれの祭礼への参加・不参加を、中国系住民意識と各村落の地域認識の問題に還元してしまうわけにはいかない。たとえば、Bao Vinh 村に居住する Châu Quý Hải 氏は、1993年にフオンヴィン社に引っ越してきたため、そもそも土地の信仰との関係が薄い。しかし、こうした個別事例の特徴を除いても、一定の傾向を看取することはできよう。

まず、Chùa Bà の祝祭への参加傾向は、Minh Hương、Địa Linh、Bao Vinh のいずれの村落に居住する場合においても高い。Chùa Bà は元来 Minh Hương 村に属しているにも関わらず、聞き取り調査によれば、Địa Linh 村、Bao Vinh 村に居住する中国系住民ともに Chùa Bà の祝祭に参加している。各寺廟の祝祭がその寺廟の属する村落と密接に結びつき、一般にその村落の構成員によって挙行されていることを考えれば、Minh Hương 村に属さない中国系住民が、Minh Hương 村にある Chùa Bà の祝祭に参加することは奇妙である。この奇妙さは、おそらくは Minh Hương をめぐる両義的な解釈と、天后宮 (Chùa Bà) との関係を考えることで理解できる。

先に紹介した Khương Văn Tài 氏は、自ら Địa Linh 村に所属していると同時に、Minh Hương 村にも所属していると答えている。この場合、Minh Hương 村への所属とは、土地への帰属を意味しているのではなく、中国系住民は Minh Hương に所属することになるという、人を分類するカテゴリー体系のなかで自己認識をしているものと考えられる。人のカテゴリーとしての Minh Hương は、Minh Hương 村という村落概念を越えて中国系住民全体を指すものとしても通用している。表 1 に記入したように、Khương Văn Tài 氏（6 番）は、Chùa Bà は Minh Hương の祭りであると答えている。Minh Hương が村落名称と人のカテゴリーの両方を指示するという両義性を考えるならば、Chùa Bà は Minh Hương の祭りであるということは、Chùa Bà が中国系住民の寺院として理解されていることを示している。このことは、表中の Âu Minh Trọng が「中国人なので正月に Chùa Bà に参詣に行く」と述べていることと呼応している。

Chùa Ông は逆のプロセスを辿っている。Chùa Ông もそもそも中国系住民が主体として建立した寺院であったと考えられる。しかし、中国系住民の誰もが Chùa Ông の祝祭へ参加する訳ではない。Chùa Ông の祝祭に参加する人々は、Địa Linh 村に居住する人々が中心である。今日ではすでに Chùa Ông が中国系住民のための寺廟としては認識されておらず、Địa Linh 村の寺廟として理解されているため、Địa Linh 村以外の地域の中国系住民が Chùa Ông の祝祭に参加していない。たとえば、表 1 において、Nhan Đạo Hiếu（3 番）、Cam Mậu Cường 氏（5 番）、Phù Vỹ Đồng Lai 氏（10 番）は、それぞれ Chùa Ông が中国系住民の寺廟ではなく、Địa Linh 村の寺廟であるために、Chùa Ông で行われる祝祭には参加しないと答えている。つまり、Chùa Ông はすでに中国系住民という人のカテゴリーに属する寺廟なのではなく、Địa Linh という土地に帰属する寺廟として読みかえられているのだ。

表 1 インフォーマントと Chùa Bà、Chùa Ông の祝祭への参加

	氏名	村名	年齢	Chùa Bà	Chùa Ông	Đình 祭	備考
1	Trần Nguyên Đăng	Minh Hương	72	Nd.	Nd.	Nd.	
2	Lưu Nguyên Yô	Minh Hương	73	○	○	-	
3	Nhan Đạo Hiếu	Minh Hương	57	○	×	-	Chùa Ông の祭りは Địa Linh の祭りなので参加しない。
4	Lý Văn Hiệp	Minh Hương	-	○	×	-	故人。妻の Phan Thị Keó 氏にインタビュー。
5	Cam Mậu Cường	Minh Hương	54	○	×	-	Chùa Ông の祭りは Địa Linh の祭りなので参加しない。
6	Khương Văn Tài	Địa Linh	76	○	○	○	Chùa Bà は Minh hương の祭りなので参加する。
7	Ngô Tùng	Địa Linh	44	○	○	○	Đình の祭りには父が参加する。
8	Hà'u Thanh Hải	Địa Linh	51	×	○	○	Chùa Ông の祭りは、正式には Địa Linh 村の祭りではなく、Chùa Ông の祭りである。
9	Âu Minh Trọng	Bao Vinh	46	○	○	×	Âu 家は Chùa Bà において百家姓として祭られている。私は中国人なので正月に Chùa Bà に行く。
10	Phù Thị Đồng Lai	Bao Vinh	63	○	×	○	Chùa Ông は中国人の寺ではない。
11	Huy'nh Trạch Ốc	Bao Vinh	76	○	×	Nd.	潮州幫の幫長である。普段は潮州会館の祭りに参加する。
12	Châu Quý Hải	Bao Vinh	50	×	×	○	1993年に Bao Vinh に移住。年に一度広肇会館の祭りに参加。

以上、Chùa Bà と Chùa Ông という二つの寺廟における宗教的祝祭が、フオンヴィン社の社会関係・土地帰属などの境界認識のなかでどのように理解されて、機能しているのかについて考察した。中国系の寺廟として出発した Chùa Bà と Chùa Ông は、今日ではそれぞれに異なる位置づけをフオンヴィン社内において付与されている。Chùa Bà は、今日においても中国系住民、すなわち「Minh Hương」に帰属すると理解されているために、居住地域の別に関わりなく中国系住民の多くが訪れる。一方、Chùa Ông は、すでに中国系住民の寺廟という位置づけを失っており、Địa Linh 村の寺廟と理解されるに至っている。そのため、Địa Linh 村に居住する中国系住民は、Chùa Ông の祝祭日に訪れるのに対して、Địa Linh 村以外の住民が Chùa Ông を訪れることは少ない。

Chùa Bà と Chùa Ông をめぐる、こうしたフオンヴィン社内部の社会的構造は、それぞれを天后宮、閩聖殿として中国系寺廟を観察する方法でのみ理解しようとしたのでは見出すことのできない側面である。

(7章担当：木村)

8. おわりに

本報告はヴェトナム・フェ近郊において実施された地理・歴史・民族学を含む総合的な調査の基礎的かつ予備的な報告である。従って、基礎的な情報の確認と、今後、継続すべき調査のための仮説構築を目的としている。文化交渉学構築をめざす本 GCOE プログラムの中で、教員と次世代研究者が中心となり、博士後期課程に属する院生たちのためのフィールド調査実習を兼ねている。専門的な研究者として研鑽を既に積んできた彼らにフィールドワークの手法を伝えることが、フィールドワークを実践し、彼らに他分野の学問領域に触れたことで総合的な研究のあり方を考えさせる端緒となれば、今後、彼らの研究に多様性をもたせる可能性は高いと期待している。

その研究蓄積から問題点を共有し今後、どのように展開していく必要があるのか、あるいは本プログラムの目的の1つである学際的な研究の可能性を考えて行かなければならない。そのような学際研究の例としてあげるならば、第7章に書かれたとおり、父系を優先する中国の親族イデオロギーとその実践の根強さ、社会的「周辺」に置かれたはずの女性を含めた民間信仰の形態、ハノイで聞き書きした仏教の位置などでも同様であるが、女性の文化論的な位置を求めるのは、今後の応用的な問題であるだろう。その中には時系列にそった歴史的な展開の把握とともに、空間的な位置づけ、つまり地理学の手法による実証は欠かすことができない。その点で今回のフィールドワークは、アジア圏での総合的な学術調査の模範となりえると言えよう。また東南アジアにしばしば観られる双方向的な親族概念への拡がりとの文化的な関係性は、人類学における親族研究の重要性を依然、懐胎していると考えている。

これらを扱うには、中国文明とその周縁地域であるヴェトナムの文化的なインターフェイスに見られる動態を把握するばかりでなく、いかに記録として残し、文化を記述する用意があるかにかかっている。アジアの中心的な中国文明がヴェトナムにどのような形となって生命力を保ち、またヴェトナムをヴェトナムたらしめている文化的なエートスとの生き生きとした関係性を、歴史・文化にもとめるのは必然だろう。また、ヴェトナム中部におけるチャンパ文明、ひいてはインド起源のヒンドゥー教・仏教文化の影響力も、文化論的に看過することはできない。海を媒介にして拡がる華人・華僑の社会が東南アジ

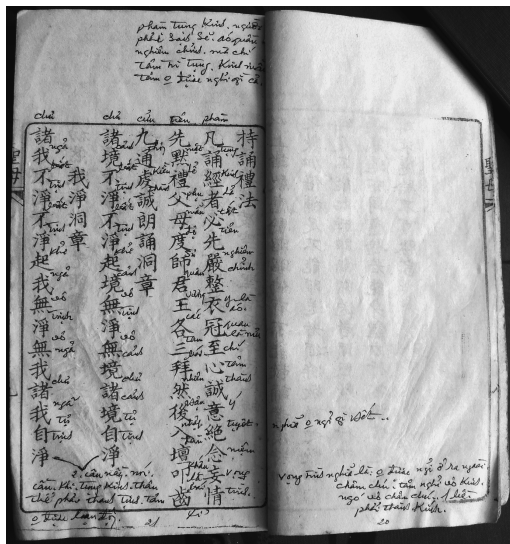
アにいくつも拠点をもつ過程で、様々な文化接触を繰り返したと想定され、ヴェトナムばかりでなく、東南アジア全体をも比較文化論的な視野に含んで考察する必要がある。ヴェトナムの研究は海洋ばかりでなく、陸上の文化伝播・交渉の例としても重要あり、中国文明とヒンドゥー文明とがせめぎ合う、まさしく東南アジアならではの魅力ある文化論、文明論となりうるだろう。こうした文明論提出は、現代における人文諸科学にもっとも欠如していると思われ、本プロジェクトの根幹にもかかわる最終的な要請ともいえよう。

（8章担当：熊野）

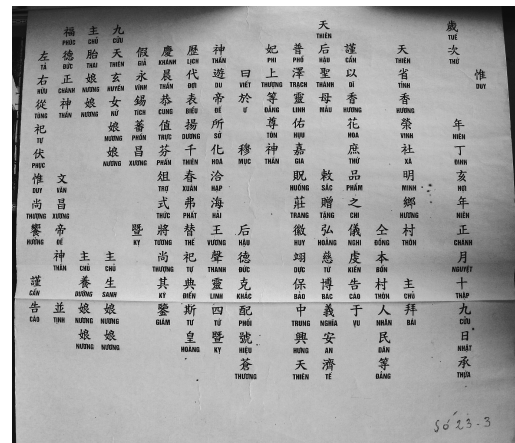
[付記]

2008年度のHuong Vinh社ならびに関連調査には、以下のメンバーが参加した。

野間晴雄、西村昌也、篠原啓方、佐藤実、岡本弘道、木村自、氷野善寛、于臣（以上、関西大学文化交渉学教育研究拠点）、Nguyễn Văn Đăng、Nguyễn Mạnh Hà（以上フエ科学大学歴史学部）。また、以下のメンバーが短期間、調査に参加した。松浦章、吾妻重二、熊野健、沈国威、原田正俊（関西大学文化交渉学教育研究拠点）。教育プログラム参加の文化交渉学教育研究拠点大学院生は以下の5名である。王頂居、鄭潔西、Nguyễn Thị Hà Thành、熊野弘子、三宅美穂。



PI.1 天后聖母救苦真經 (天后宮)



PI.2 天后聖母の祭礼に用いる祭文「告」(天后宮)



PI.4 天后宮大洪鐘 (天后宮)



PI.3 天后宮扁額1 (天后宮)



PI.5 本殿内祭壇にある香炉1 (天后宮)



PI.6 天后宮殿前鉄製香炉2（天后宮）



PI.7 本殿内扁額（関帝廟）



PI.8 御製詩碑（関帝廟）



PI.9 関帝廟大洪鐘（関帝廟）



PI.10 関帝廟殿前鉄製香炉（関帝廟）



PI.11 天后聖母
(天后宮・中央奥神棚・中央)



PI.12 天后聖母の息子
(天后宮・中央奥神棚・手前)



PI.13 千里眼
(天后宮・中央奥神棚・左側)



PI.14 順風耳 (天后宮・中央奥神棚・右側)



PI.15 三胎聖母娘娘 = 三体。
(天后宮・右奥神棚)



PI.16 文昌帝君 = 聞き取りでは「文昌
(Văn Xương)」。表記は祭文による。
(天后宮・左奥神棚・右側)



PI.17 福德正神 = 聞き取りでは「福德
(Phúc Đức)」。表記は祭文による。
(天后宮・左奥神棚・左側)



PI.18 関雲長（関帝）
（関帝廟・中央奥神棚・中央）



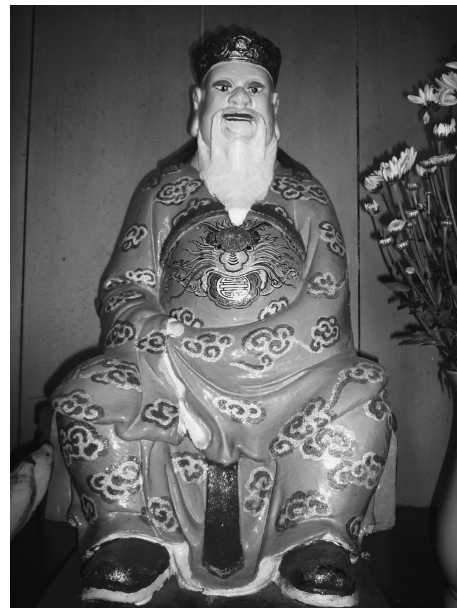
PI.19 関平（関帝廟・中央奥神棚・左側）



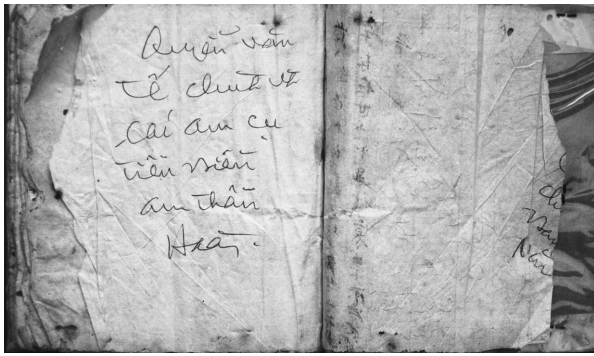
PI.20 周倉（関帝廟・中央奥神棚・右側）



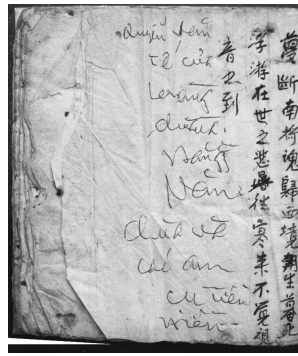
PI.21 Thiên Y-a-na＝中央のチャンパの女神像。
両脇の像は菩薩？管理人もよくわからない。
（関帝廟・右奥神棚・中央）



PI.22 財神（Thân Tài）（関帝廟・左奥神棚）

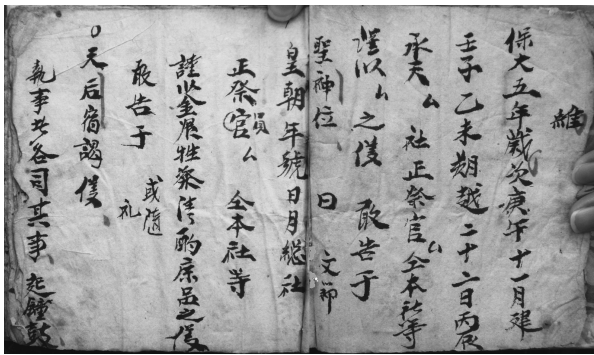


3



1

天后宮に保管されていた祭
礼帖（資料番号21）

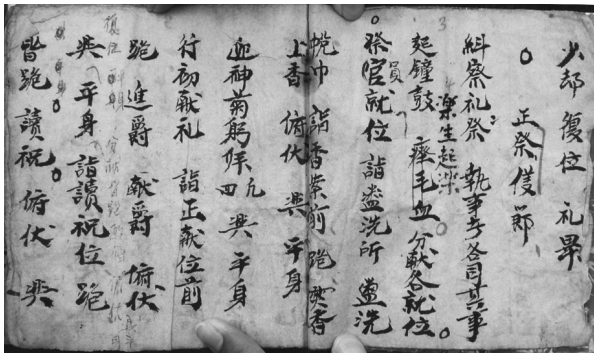


7

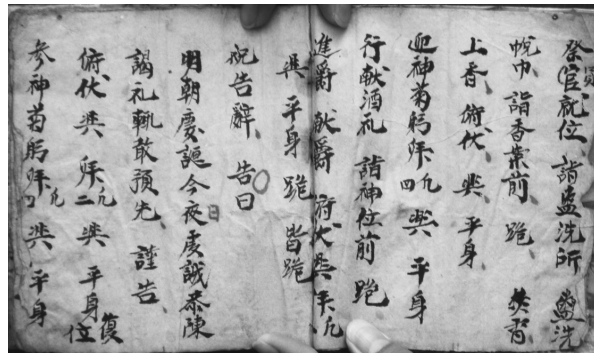


5

4

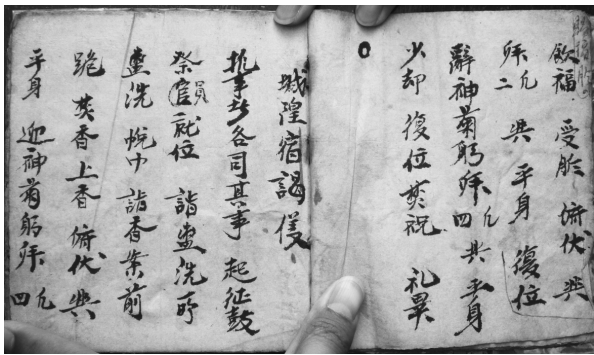


11

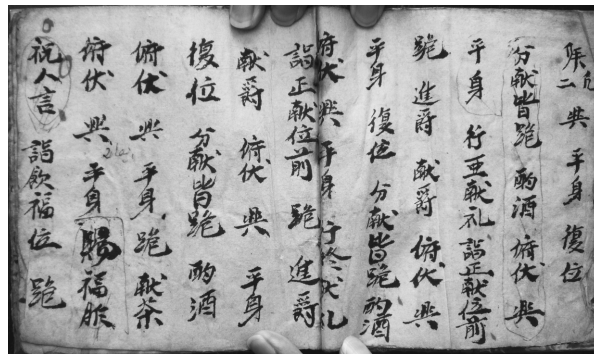


9

8



15



13

12

諸盥洗所 盥洗 跪中
詣神位前 跪 焚香 上香
俯伏 共 平身 鞠躬 躬拜
共 平身 行初献礼
詣神位前 跪 進爵 献爵
俯伏 共 平身 共 平身
詣讀祝位 跪 皆跪
讀祝 俯伏 共 平身
共 平身 復位 行重献礼
詣神位前 跪 進爵 献爵
俯伏 共 平身 共 平身
復位 行終献礼 詣神位前

19

共 平身 行献酒礼
詣神位前 跪 進爵 献爵
俯伏 共 平身 共 平身
跪 皆跪 祝告 辭 告曰
明朝春祭 今日是陳伏惟
登終末行 謹告
俯伏 共 平身 共
平身 復位 辭神鞠躬 躬拜
共 平身 礼畢
○ 正祭礼
糾察祭礼 托事女各司其事
起征鼓 瘞毛血祭 讀祝位

17

焚香 上香 俯伏 共 平身
迎先 鞠躬 躬拜 共 平身
行献酒礼 詣案位前 跪
酌酒 進爵 献爵 俯伏
共 平身 共 平身 跪
皆跪 祝告 辭 告曰
明朝秋祭 今日是陳伏惟
詣讀祝位 先賢先是格 登
謹告 俯伏 共 平身
共 平身 復位 鞠躬 躬拜
共 平身 礼畢
○ 正祭礼 先賢 儀

23

跪 進爵 献爵 俯伏
共 平身 共 平身 復位
跪 献茶 俯伏 共 平身
賜福 辭 詣飲福位 跪
飲福 受酢 俯伏 共
平身 共 平身 鞠躬 躬拜
復位 辭神鞠躬 躬拜
共 平身 焚祝 礼畢
○ 先賢宿謁 儀
起征鼓 托事女各司其事
祭官就位 詣盥洗所
盥洗 跪中 詣香案前 跪

21

托事女各司其事 起征鼓
瘞毛血 各献各就位
祭官就位 詣盥洗所
盥洗 跪中 詣香案前
跪 焚香 上香 俯伏 共
平身 鞠躬 躬拜
俯伏 共 平身
參神鞠躬 躬拜 共
平身 行初献礼
詣案位前 跪 酌酒
進爵 献爵 俯伏 共
平身 詣讀位 跪 皆跪

27

讀祝 俯伏 共 平身
共 平身 復位 分献 皆跪
酌酒 共 平身 行重献礼
詣案位前 跪 酌酒
進爵 献爵 俯伏 共
平身 復位 分献 皆跪
酌酒 俯伏 共 平身
行終献礼 詣案位前 跪
酌酒 進爵 献爵 俯伏
共 平身 復位 分献 皆跪
酌酒 俯伏 共 平身
跪 献茶 俯伏 共 平身

25

行献酒礼 詣神位前 跪
進爵 献爵 俯伏 共 平身
共 平身 皆跪 祀告 辭
告曰 明朝春祭 今日是陳
願其 登格 伏惟 謹告
俯伏 共 平身 共 平身
復位 辭神鞠躬 躬拜
共 平身 礼畢
○ 正祭 儀
省祭祭礼 起征鼓
托事女各司其事 祭官就位
詣盥洗所 盥洗 跪中

31

文明 宿謁 儀
起征鼓 托事女各司其事
祭官就位 詣盥洗所 盥洗
跪中 詣香案前 跪 焚香
上香 俯伏 共 平身 迎
神鞠躬 躬拜 共 平身
賜福 辭 詣飲福位 跪
飲福 受酢 俯伏 共
平身 共 平身 復位
辭神鞠躬 躬拜 共
平身 焚祝 礼畢
平身 復位 焚祝 礼畢

29

諸香案前 跪 焚香 上香
俯伏 共 手身 叩神前
年九 共 手身 行初献礼
詣神位前 跪 進爵 献爵
俯伏 共 年九 共 手身
詣讀祀位 跪 皆跪 讀祀
俯伏 共 年九 共 手身
復位 行巫献礼 詣神位前
跪 進爵 献爵 俯伏 共
年九 共 手身 復位
行終献礼 詣神位前 跪
進爵 献爵 俯伏 共 年九

35

典 手身 復位 跪 献茶
俯伏 共 手身 辭神前
共 手身 火部 復位
焚祝 礼畢

34

33

32

初本城隍加贈保安正真佑
善哀凝翊保中興尊神
日唯神大哉萬德盛矣
洞疆拓土永奠後居保墜
佑民專司重寄國贈焜煌
神麻先責祀享于春稱揚
萬禳春祭載陳微誠格致
俾本社等物阜民康風淳
俗美玉振文風綏將福履
而頌 尊神之加惠也 暨
左右從祀 伏惟尚饗謹告
○先賢之儀

39

朔保中興天妃上等尊神
日於穆 后德克配 昊蒼
神遊 帝所化洽海玉聲昇
灵四暨 歷代表揚 千春
祀典斯皇 慶農恭值 分祀
或將尚其 暨 暨 暨 暨
暨 暨 暨 暨 暨 暨
九天玄女 娠娠 福德正神
文昌廟君 並 左右從祀 伏惟
尚饗 謹告
○城隍之儀
年号如前 謹以 敬告于

38

37

36

日 亦止南山 聿來眉宇
百年于茲 民安物阜 人生代謝
往來古今 我思古人 悠口
我心 專誌 松楸 霜露 辰至
慨彼 黃墟 亦賴 深薦 為止 東既
之水 南流 湯止 神其 無之 痛惠
我無疆 暨
緣寡孤 獨諸 亡靈 同來
附享 謹 告
○祭文明殿廟儀
年号如前 敬告于
皇朝成科進士 謹授文明殿大

43

年号如前 總社 正祭官
謹以 敬告于
始遷立社先賢列位
文明殿大學士陳公靈位
本社職邑先賢列位
本社舉人秀才先賢列位
本社知縣守備先賢列位
本社用子員子先賢列位
本社里長金長甲長先賢列位
本社課生鄉飲先賢列位
本社義學諸先賢列位
本社義學諸先賢列位
過故男婦老幼亡靈列位

42

41

40

解公對
日瑞洲曰度洲曰後洲曰湖洲
同是中洲 故世族
或士業或農業或工業或
高業或教業 幸其尊民生
於鄉黨 似不能言 古
之父子 如何 其行
愛之 精神 合群 思德
中原之 處 南 度 衣 裳
宜 悔 之 以 社 社 會
中 洲 亦 崇 眉 花 風

47

學士陳相公神位前 日
值晴 頌德 親河 忠功 古人 不
朽 純澤 無窮 恭性
先正神降 嶽 萬 珠 林 甲 筆 黃
閣清風 三朝 奮 頌 休 止 有 容
若 名 冊 史 正 氣 懷 忠 節 賢
建 廟 國 典 策 封 紀 念 生 日 常
年 禮 隆 尚 其 崇 格 樂 崇 民
同 謹 告

46

45

44

傳信汝南高月旦
鳥衣治表尚風流
飛鳥不勝那國感
急羊多奈少辰心
薄海有天皆大統
正氣多地不榮封
伏伏興興身身
復位行五就礼詣神位前
跪進爵獻爵俯伏
伏伏興興身身復位
行於就礼詣神位前跪
進爵獻爵俯伏

51

傳信汝南高月旦
鳥衣治表尚風流
飛鳥不勝那國感
急羊多奈少辰心
薄海有天皆大統
正氣多地不榮封

50 49

48

